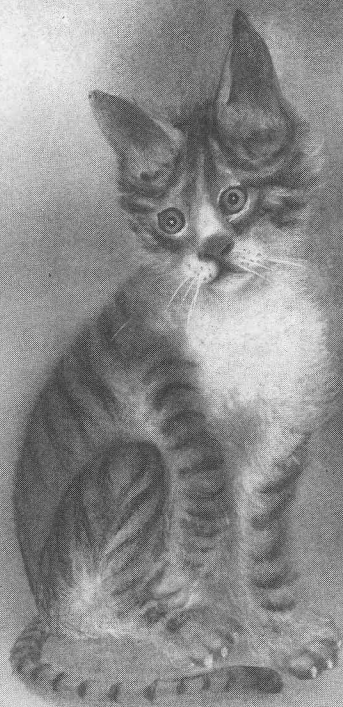


季刊 連句 第24号

平成元年三月一日発行



「おくのほそ道」の正花（南柏雑記 22）……………	1
「あたまうつな」の見立て替え……………佐藤廣幸……………	2
「鳶の羽も」の巻 鑑賞（Ⅲ）……………東 明雅……………	4
沙羅の会 歌仙二巻……………捌・文 東 明雅・式田和子……………	8
「蓑虫」付勝練習二十韻……………	10
「新一夜四歌仙」……………文 草間時彦……………	12

第二十八回 猫蓑会 二十韻七卷…………… 16

捌 内田麻子・福井隆秀・米谷貞子・瀧川雅代

金久保淑子・山崎一恵・若尾よしえ

余興二十韻膝送り二巻 松とれて・七日粥

文 秋元正江

電通連句部 残る紅葉……………捌 秋元正江・文 山口美恵……………	21
柏連句会 二十韻四巻……………捌 東 明雅・秋元正江……………	22
福井隆秀・下鉢清子 文 下鉢清子	
四宮連句会 後の月……………捌・文 永島靖子……………	24
興流連句会 紫蘇の実……………捌 尾向閑堂・文 田原竹無斉……………	25
赤山連句会 酸漿市……………捌・文 二宮操一……………	26
関口連句教室 歌仙 木守柿……………捌・文 下鉢清子……………	27
雁帛往来・連句会案内……………	29

# 「おくのほそ道」の正花

南 柏 雜 記 22

雅

「おくのほそ道」の湯殿山のとこに次のような文章がある。  
谷のかたはらに鍛冶小屋といふあり。(中略) 岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり、降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。炎天の梅花ここにかをるがごとし。行尊僧正の歌のあはれもここに思ひ出でて、なほまさりておぼゆ。総じてこの山の微細、行者の法式として他言することを禁ず。よって筆をとどめてしるさず。  
右の一文を読んではつと気が付いたことがある。湯殿山は秘密行法の山で、山上のことは一切口にはならぬといひながら、それを敢て守らず、山中の遅桜のことを記したのは何故か。これは、この「おくのほそ道」一巻の中に何とかして正花を一つ入れたかった芭蕉の念願を示しているものではなからうか。

「おくのほそ道」は序・破の一段・破の二段・急という歌仙の四つの部分に分けて作られているというのが私の持論である。書き出しから遊行柳・殺生石あたりまでの関東が表、白河の関を越えて松島から平泉までが裏、尿前の関か

ら象瀧・市振をへて全昌寺までが名残の表、越前へ入って汐越の松から大垣までが名残の裏と考えているが、この一篇の中で月花の句はどうなっているだろうか。  
門出の「弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月是有明にて光をさまれるものから」とあり、この文章の続きに「富士の峰幽かに見えて上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し」として、月も花も一緒に出ている。さらに裏の月は松島で出ているので、初折にあたる部分はこれで完全であろう。

名残の折で芭蕉が最も苦労したのは、名残の折の正花(句の花)をどのようにして出すかということであろう。旧暦の六月と言えば太陽暦では七月・八月の暑い盛りである。空想の花はもう出せないし、卯の花・紅粉の花・ねぶの花は咲いていても、それらは正花にはならない。それでやっと見つけた遅桜のことを山の定法を破ってまで出すということになるのである。そして、遅桜とだけではなく、「花の心わりなし」と花の字をちゃんと使っている。遅桜だけでは正花にならないからである。

名残の裏にもう一箇所、敦賀のところでは名月が出ている。これで二花四月になるが、月の句はもともと、面に一つずつあってよく、二花三月は最後の月を省略したもので、二花四月の歌仙例は外にも沢山ある。引き上げた句の花の定座を月で埋めたものと私は考える。

## 「あたまうつな」の見立て替え

佐藤 廣 幸

蕉風連句の一句一句は完全に独立して、それぞれの句から喚起される実感の交響によって付句が微妙につながり、余情の流れが作り出す自然な付け運びが歌仙一卷を仕上げた。これが今日われわれがもつ芭蕉の連句への一般的認識である。この認識に私もおおむね賛成である。

ところが、芭蕉の連句とは凡てこうしたとどのつたものかといえども云えない。この枠におさまらないものがあることも否定できない。その実例が『続猿蓑』の「八九間」の巻の中にある次の三句の渡りである。この歌仙は蕉風の円熟期の芭蕉最晩年の元禄七年の作品であることを忘れてはならない。

笹の葉に小路埋ておもしろき

あたまうつなと門の書つけ

いつくへか後は沙汰なき甥坊主

沾圃

芭蕉

里圃

沾圃の打越の閑静な句から、芭蕉はその余情を汲みとり、風雅な隠者風の人物を思い浮べて、そんな人の住みそうな草庵のあるぐり門に貼り付けてある「頭に御用心」という貼紙を付けた。次の里圃の付句は、芭蕉の前句を門の貼

紙と見たのではどうにも付けにくく、また三句目の転じも果せないで、芭蕉の前句を全く別の意味にとりかえることによって新しい展開をはかるように、前句の「見立て替え」を行った。換言すれば、前句の余情からではなく、前句の句意からの係わりに比重を置いた「句意付」によりこの場を処理しようとした。即ち叔父の和尚の厳しい修業に堪えかねた甥の見習僧が、叔父に「頭を叩くのはやめて貰いたい」と書置きを門にのこして叔父の寺を飛び出して行衛をくりましたと、解さねばならぬ様なドラマチックな付句とした。この三句の渡りは、こう解釈しなければ、その脈絡を辿ることはできない。作品を面白くするため、恣意にこう解釈したのではなく、その原因は既に制作の際の作者の意図にあったとしなければならぬ。この三句の製作過程を追体験することによって、里圃は三句目の転じを行うために、意識的に前句の見立て替えを行って、こう句作りしたと推察できる。後の鑑賞者が、故意に前句の句意を改変して、こう解釈したのではないことは明白である。里圃はこの場合、前句の余情を汲みとり、おだやかな付け方にしようとして試みたが、うまく三句の転じも出来ず困り果てて、前句を見立て替えて、その「句意付」に賭けた句作りをし

たのであろう。そこに注目した太田水穂（一八七六一—一九五五）は、その著『芭蕉連句の根本解説』（昭和五年刊）の中で、この付句を次のように評している。「はたらきのある附である。芭蕉が手をとって附けてくれたのではなからうか。こゝには芭蕉の手の臭いが可なり濃く出でゐる。」この付句に芭蕉が手を加えたかどうかは別として、前句を見立て替えて、三句目の転じを行い、新局面をひらいた工夫をほめて、水穂は「はたらきのある附」と評したのであろう。

「あたまうつな」という芭蕉の語句は、打越の句に付けたときは、「Watch your head」（「頭をぶつけないように気をつけろ」という「注意書き」であったが、次の里圃の付句になると、「Don't beat on the head」（「頭を叩くな」という「抗議文」）に意味が変えられて付けられたと見做さなければならぬ。このように里圃は、芭蕉の前句の句意を継いで、三句目の転じを行ったのである。沾圃・芭蕉・里圃と続く、この三句の渡りは、芭蕉の前句の「見立て替え」なしには、こうはおさまらなかつたように思われる。東明雅先生の『連句辞典』により、「見立て替え」を確かめてみると、次のように解説されている。

打越の句に対して付けられた前句の趣向を、付句を付けるときに別の意味に解釈すること。主に談林俳諧で用いられた手法で、一句一句の独自性や三句の渡りを重んじる蕉風連句では、前句の解釈可能な範囲内で行われる。

奇抜で極端な曲解をしたり、好んで用いるということはない。

蕉風の連句では、こうした「見立て替え」による三句目の転じを、時として行うことが是認されていたようで、芭蕉の連句を凡て、「余情付」で解釈し、鑑賞しようとする画一的な態度は改めなければならない。現にここに挙げた『続猿蓑』の実例にしても、また初期の『冬の日』や『曠野』や『ひさご』の作品にもその実例がある。だから明雅先生も『連句辞典』の「句意付」の項で、「蕉風連句もまた前句の意味を十分に汲み取って付けるものであるから、句意付の手法が皆無というわけではない」と、ことわっていられるのである。

最後に、大正・昭和初期の連句及びその史的研究に大きな足跡をのこした贅川他石（一八六八—一九三五）が、蕉風連句の「見立て替え」について述べた所見を紹介しよう。他石は「見立て替え」の例として、『続猿蓑』のこの三句の渡りをあげて次の様に解説している。

この三句の中の「あたま打つな」の句は、低い軒を注意するための貼札なのであります。それを「何處へか」の句を附ける場合に於ては、之を師の坊の烈しい警策に堪へられずして逃げ出した甥の小坊主の悪戯の貼札也と解するのであります。即ち、「あたま打つな」の解釈を両様にいたすのであります。

他石は「見立て替え」が果して、蕉風附方の一として準據すべきものかどうかという点については、自分としては大いに躊躇するところである。なぜなれば、連句の一句一句がかような不自然な進展をする附方は、蕉風開眼以後の芭蕉の作品には殆んど無いからである。そして芭蕉の説話を記述した『三冊子』や『去来抄』を見ても、「見立て替え」についての説示は遂に見出得なかった。ただ一つ『去来抄』に次の様な記述があった。

去来曰。附句は何事なくさらさらと聞ゆるをよしとす。巻をよむに思案工夫して附句を聞むは苦しき事也。

他石はこの去来の言を「見立て替え」を否定する詞と考えてよいと述べ、蕉風の「見立て替え」による解し方、附け方に深い疑念を投げかけている。昭和初期の連句研究の先駆者、贅川他石の言をここに紹介した。この見解は、昭和五年刊行の、増田龍雨・贅川他石著『連句作法・連句私解』と題する単行本の後者の記述の中に見出される。

## 「鳶の羽も」の巻 鑑賞(Ⅲ)

東 明 雅

6

まいら戸に鳶這かゝる宵の月

人にもくれず名物の梨

去来

であるが、この付合は、荒れた邸を照らす宵の月から、ここに棲む人物をもって付けたのである。

「徒然草」の面影付けであるという説については後述。

(秋。梨。人情他)

(現代語訳) まいら戸に、軒の鳶が這いかかって、夕月に照らされているこの邸には、近在に知られた名物の梨があるのに、主人は人に与えようと思しめない。

(付心) 起情の句、起情とは、人情無の前句から、特別な感情をひき出して、それに叶った人情の句を付けること

(付味) まいら戸と名物の梨は位の付けである。位とは前句にある事物と付句にある事物の品位がよく相応することである。さらに、宵の月と名物の梨は移りがよく、頼原退蔵氏はこれを句の感合と言っている。(日本古典読本「芭蕉」)

(転じ) 人情無の句から人情の句へと転じ、特異な人物

の性格の一端を描写して、作品に深みを加えている。

(補説) この人物については、①片意地者・変屈な人・奇癖の人・狷介な人、②吝嗇な人、③世に拗ね隠れ住む人・孤高な人品骨柄の人と評価が分かれている。右の三説のうち、②の吝嗇のみを取り上げた場合は、前句の位と合わない。また③の主人公を讚美するかの如き気分も、「人にもくれず……」という、いささか非難・批判めいた口吻を無視するものとなる。③の説は、次の史邦の付句を俣ってはじめて納得されるところとなるもので、いわば史邦は「人にもくれず」を見立替えていると考えるべきであろう。それ故、表現はいろいろあると考えられるが、①の説の中のどれかに当ると考える。そして、吝嗇という要素もいささか裏面にはあってもよいと思う。

この句は「徒然草」の面影と見る説が古来有力である。

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遥かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。……(中略)……かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか (第十一一段)

徒然草は元禄のこの頃、大愛愛読された本であり、その中でもこの十一段は特に有名な段であるから、去来の脳裏のどこかにこれがあった、自然に出たものであろうか。面影とは、古事や古歌などを使って付ける場合、それはは

きりと表面には出さず、おぼろ気に表現して、しかも読み人にすぐそれと感ぜさせる付け方である。

これで六句までが終った。発句から六句までを表六句と言ひ、一巻の序・破・急の序にあたる部分で、穩かに進行させ、神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・病態・地名・人名などは出さないことになっている。この巻は右にのべるような嫌忌のものは何も出されていない。極めて穩かであるとともに、変化に富み、理想的に進行している。

7

人にもくれず名物の梨

かきなぐる墨絵おかし秋暮て

(秋。秋暮て。人情自)

史邦

(現代語訳) 我が家の名物の梨を人に頒け与えることもなく、ただ墨絵を書きながら楽しんでるうちに、今年の秋も暮れて行く。

(付心) 其人の付。前句の人物の境涯・心境を述べたもの。  
(付味) 名物の梨と墨絵とは位の付。

(転じ) 打越の人情無から一転して、風雅の人を描き出した。補説参照。

(補説) 同じ「徒然草」に次の一段がある。

「真乗院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物をこのみて、おほくくひけり。談義の座にても、おほきなる鉢にうづたかくもりて、ひざもとにおきつゝ、くひながら文をもよみけり。わづらふ事

あるには、七日二七日など療治とて籠居て、思ふやうに  
よきいもがしらをえらびて、ことにおほく食て、万の病  
をいやしけり。人にくはする事なし。たゞひとりのみぞ  
くひける。(同書六十段)

この段の存在を指摘したのは浅野信氏の、「七部集連句  
猿蓑注釈」がはじめてで、阿部正美氏も「芭蕉連句抄第八  
篇」に引用している。但し、二人ともこの段を、第十一  
段と同じように、前句の説明の時、引用している。即ち、去  
来が前句を作った時、この徒然草の二つの段が彼の脳裏に  
浮かび、それを面影にして作句したというのである。一応  
尤もであるが、私は去来は先にあげた第十一段を面影にし  
て作り、史邦はさらに第六十段を加え、いわば見立替えに  
して、この句を作ったと見る方がおもしろいと思う。

さすれば、打越と前句では、蕙の這いかかるまいら戸の  
中に住むやや吝嗇な変屈な人を描き、前句とこの付句とで  
は、墨絵に耽って、名物の梨を人にやろうとも気がつか  
ない「世をかくろく思ひたる曲者にて、万自由にして、大方  
人にしたがふといふ事なし」(「同書」六十段)という人を  
描いたと見る方が、変化があってもおもしろいのである。特  
にこの打越・前句・付句の三句のわたりについて、鈴木景  
山の「猿蓑四歌仙解」などは、前句を中心に、扉(輪廻)とも  
言う。打越が同意・同趣になる事をいう)となつていると  
指摘している程であるから、この人物の見立替えはやはり  
意図して行なわれたものと見るべきであろう。

そう言えば前句の「人にもくれず」は、打越と付いた場

合は「人にくれず」と同じ意と解されるが、この付句と付  
いた場合は「自分も食べないし、人にも与えない」という  
意にしているようである。これも見立替えを助ける方法で  
あった。かくて、ここでの主人公は、吝嗇の気を全くはな  
れ、第六十段に

「とき、非時<sup>ひじ</sup>も人にひとしく定てくれず、わがくひたき  
時、夜なかにも晝にも食て、ねぶたければ昼もかけこも  
りて、いかなる大事あれども人のいふ事き、いれず、目  
さめぬれば幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありき  
など、尋常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろ  
づゆるされけり。徳のいたれりけるにや」

と書かれた盛親僧都の面影を見ることができるのである。  
かきなぐるとは、なぐり書きをする、書きちらすの意味  
である。おのずから氣韻生動の有様が眼に浮かぶ。

墨絵は水墨画で、色彩を用いず、墨の濃淡だけで景色や  
人物を描くもの、いわゆる文人画風なものである。

おかしくは、絵の出来ばえを指しているのではなく、書  
く人自身がおもしろいと感ずるのである。

秋暮ては秋も終り方になつたことを指す。また、前句と  
の關係で見ると、名物の梨は、打越と前句とでは、邸の内  
に枝もたわわになつている景をしのばせるが、前句と付句  
との場合は、室内、卓上に籠か菓子盆などに盛つてある梨  
の実と見る方が変化があつてもおもしろいし、その方がさき  
の盛親僧都の「談義の座にても、おほきなる鉢にうづたか



くもりて、ひざもとにおきつゝ、くひながら文をもよみけり」という面影にも叶うものであらう。

8

かきなぐる墨絵おかしく秋暮て

はきごころよきめりやすの足袋

凡兆

(雑。人情自)

(現代語訳) 墨絵をおもしろく描きすさぶうちに、いつしか秋も暮れたが、履いているメリヤスの足袋の履き心地が何とも言えず快い。

(付心) 其人の付け。前句の人物の感慨を示したものの。

(付味) 自由奔放に描きちらす墨絵のおもしろさと、伸縮自在なメリヤスの足袋(靴下)を履いた快さとが通いあう。

(転じ) このところの三句の渡り(打越・前句・付句の關係)については、宮本三郎氏の「蕉風連句手法の一考察」(「蕉風俳諧論考」所載)の研究がある。それによれば、宮本氏もこの三句に変化なく停滞気味な点を肯定しておられるようであるが、打越は名物の梨を他人にくれないというところに、自他半か、あるいは他の句と考えられ、前句・付句がともにはっきりした人情自の句であるのとは、形の上でも一応変化が付けられていると見るべきである。

(補説) めりやすの足袋については、「墾道」第五号に、佐藤廣幸氏の「めりやすの足袋——七部集連句覚書」の一文があり、その中で氏は、めりやすの特質・日本への伝来・語源について詳細な研究を発表され、

英国でメリヤス機械が完成したのはエリザベス王朝の一五八九年で、我が国の豊臣秀吉が天下を統一した前年に当る。ウィリアム・リー(William Lee)という牧師がこの機械を發明した。これが今日のコトン式靴下編機の元祖である。「猿蓑」の刊行された元禄四年(一六九一)から約百年前のことである。「猿蓑」の「めりやすの足袋」が手編みであったか、機械編みであったかの実証は困難であるが、メリヤス機械發明から、およそ一世期を経たことを考え合わせると、機械編みのめりやす靴下が輸入されていたと見ても決して不都合ではないと述べておられる。

延宝八年(一六八〇)刊の「洛陽集」に「唐人の古里寒しめりやすの足袋」の句があり、同九年刊「西鶴大矢数」にも「紅毛よりも帗織売、めりやすが脱れぬ事なら草履ぬげ」(第九)。「長崎下り住吉の浜、目瑠耶子をはいて蛤蛸踏れたり」(第十九)などの用例が見られる。おそらく外国製の靴下そのままを「めりやすの足袋」あるいは「めりやす」と呼び、貴重な舶来品として、富裕な人が用いたものであらう。当時としては、非常に目新しい用語であり、また、外国の新しい文物に対するエキゾティズムという点において、前句の墨絵と通うものがある。

因みに足袋は現在では冬の季語になっているが、江戸時代後期に入ってからのことで、元禄のころはまだ季語として用いられていない。

沙羅の会

歌仙二卷

昭和六十三年十一月十六日  
於 京橋区民館

亥の子餅

東 明雅 捌

逆茂木のこと

東 明雅

京橋や亥の子の餅を売る老舗

行き交ふ人の冬めきし肩

サツカーのあぐる歓声響き来て

せがまれて取るあやとりの紐

玻璃戸越し梢にかかる三日の月

久美子

醸したる葡萄酒金の杯に

海泡石のパイプくゆらせ

克蘭ケの来ぬ幸ひを看護婦と

長い人生ちよつとずっこけ

十一面観世音負ふ大笑相

町 麻

蓮の浮葉に月の小波

ひげのある鮎もどきなど皿にのせ

名なく家なくヒッピーのまま

猫又の至福千年棲むあき地

綱の玉のうなる起重機

自転車のペダルも軽く花曇り

弘 美

生雲丹の小さき塚が旅のつと

麻

逆茂木とは、敵の侵入を防ぐため、とげのある枝を外の方へ向けて結んだ柵のことであるが、連句の座で互いに助けあって障害を取り除き、秀逸の句を続けることを言い、ことに人情の句を数句続けて面白味を増すように工夫することをいう。

蛙言葉で詩を書いて逝く

千町

弘子

麻子

瑞枝

杉亭

明雅

枝

町

麻

町

枝

亭

弘

美

亭

美

弘

古伊万里の壺を飾れるシャンゼリゼ

麻

六句目は他、七句目自、八句目自他半、九句目場、十句目他、中に場の句が入っているの、純然たる逆茂木とは言えぬかも知れぬが、みな結構楽しんでいただいた。

六中観

式田和子

紅葉散る

式田 和子 捌

紅葉散りそめて京橋宝町

信号赤にふはり綿虫

魴鯉の髻をつかみて料らん

一行の軸掛ける脇床

翼照らす月の小さくなりまさり

子を遊ばせる木の実転がし

音高くボージョレヌーボー栓を抜く

もうワンランク上と云ふギャル

靴下も洗ってくれる夫と添ひ

杭かくるほど汐の満ちきぬ

風化して面輪やさしき石仏

犀星の碑にふれて夏月

沙羅咲かせ浪人ひとり留守をもち

苦しい時に役にたつ秘書

直行のデズニールランドオプシヨナル

象牙のキユウで撞いた四つ玉

山彦を呼べば遙かに花霞

巢立ちの鳥のひたに鳴き居り

和子

みづゑ

正江

孝子

啓世

正雄

遊

ゑ

孝

雄

遊

江

世

孝

江

遊

孝

世

春の日のガレージセール繁昌し

母が秘伝の常備薬服む

得々と植木談義で煙に巻き

根雪がしみる過疎となる村

着任の先生若く丈高く

急に化粧の時の長びき

殺したいほどに狂ひし魔の電話

BGMに喜多郎の曲

真帆片帆染めて涼しき呉須の皿

婆の仕草をまねるままと

うたたねに西瓜のやうな月がさし

前方後円ちち蟬聞く

三宝に新絹巻きて供へけり

駅に群れ居るボーイスカウト

盲導犬寄り添ひて伏す瞳の静か

とく起きて逢ふ螢鳥賊漁

吟醸酒ずんと据ゑたる花主

庭下駄濡らしあたたかな雨

ゑ

江

雄

孝

世

江

ゑ

遊

同

江

雄

遊

孝

世

和

ゑ

沙羅の会の捌当番が回ってまいりまして、「苦中楽有り」たいものと秘かに思いました。何しろ、連衆は「腹中書有」る方ばかりですから。

第三では、発句の「て」を嫌って

魴鯉の髻をつかみて料らん 正江

と、「意中人有」る句が出まして、前途

を楽観。

靴下も洗ってくれる夫と添ひ 孝子

こんちきしょう、と思いますが

杭かくるほど汐の満ちきぬ 正雄

ひたひたと穏やかに受けられ「忙中閑有

り」。四つ玉の音が花の山彦と響きあい、

根雪の村にも若い先生が赴任すれば、女心を啓世さんがしっかりつけられました。し

かし、どう納めようかと思うところへメル

ヘンが出て、「死中活有り」。

うたたねに西瓜のやうな月がさし みづゑ

それからは、捌、花主はずんと気が大き

くなり、「壺中天に有り」の境地に遊ばせ

ていただきました。

# 菘虫

付勝練習二十韻

東 明雅

投句締切  
4月20日

五句目	心太芥子きかせてすすり込み	淳子
六句目	制服ぬいだ彼とくつろぐ	よしえ
七句目		
治定	さりげなくお守りだよと犬はりこ	元子
1	芝居めく恋の言葉を幼げに	哲
2	忘れじのゆく未までの初キッス	弘次
3	耳もとにそのひとことをささやかれ	妙子
4	しなやかに眼鏡き獸なり	藍子
5	身重妻つれて誇らし面映ゆし	達子
6	あれこれと言あげしては甘えをり	うせい
7	紙反古に恋のひともし散らし書き	鋭太郎
8	初恋の君と会ふ老い隠し得ず	千雪
9	ワープロで打たれた恋の定期便	良子
10	転勤となりて不倫を精算し	淑子
11	九官鳥「愛してるワ」と折もよく	あかり
12	九官鳥気にしふたりの習ひごと	遊
13	綻びを繕ふ隙にぬすむキス	淳子
14	職場ではすれ違っても無視するの	澄子

(応募受付順)

※う。7この句は情景がやや曖昧である。これは場の句で  
 あるうから、確かに打越からの転じはあり、また、恋の気  
 分も何となく滞っているが、私にはこの句の本当の意味す  
 るところが理解できないのである。8はおもしろいが、内  
 容がすこし豊富すぎるのではあるまいか。また、「老い隠し  
 得ず」が前句の「くつろぐ」の感じにややそぐわないような  
 感じがする。9ワープロで打たれた恋文というところに、  
 前句の制服の余情が感じられ、その点はおもしろいと思っ  
 た。また、打越からの転じも十分利いている。10は前句の  
 事情を説明している。それは一応理が通っているが、理が  
 通っているだけにおもしろくない。同じことを言うのでも、  
 もすこし物を見る角度をかえるか、その事実の切り取り方  
 を工夫するとか、表現を変えておもしろくするとかする必  
 要があろう。11この巻にはまだ動物の姿がなかった。次の  
 12の方ならんで九官鳥が出て来たのにはびっくりした。  
 鳥でありながら人語を話すこの鳥は、材料としてはおもし  
 ろく、また恋の雰囲気も持っている。11のこの句は人情な  
 し、12は自他半のつもりで出されたと思うので、打越の難  
 はないけれども、九官鳥と言えば籠の鳥、室内で飼われる  
 ことが多い。打越の心太がどうも室内の景らしく思われる  
 ので、何か打越から一続きのような感がしないでもない。  
 13もその点はやはり室内の景のようであるけれども、九官  
 鳥みたくに印象の強い言葉がないから、その点はよいと思  
 うし、綻びを繕っている女性、たわむれてキスを盗む男性  
 いかにも前句の「くつろぐ」という余情が入っていてよい

1 制服を脱いだ彼との、ややぎこちない対応がしのばれてほえましい。まだ、すれていない若い二人の關係が想像される。だが、「芝居めく恋の言葉」をもっと具体的に表現出来ないものか。2は「忘れじのゆく末まで」をそのまま用いてその点に新しみはないが、下五の「初キッス」が利いている。「初キッス」と「キスの味」と二つ出してあったが、それは断然、「初キッス」の方であろう。制服を脱いだ彼と久しぶりにあって、キッスをしてしびれたというのでは、あまり平凡である。3打越との変化に十分注意をして、豊富な内容を暗示的に出している。その点老巧と言えるであろう。ただ、この句はいわば出来すぎた句であるために、前句、ことに「制服」との間の余情が十分に生かされていないのではないか。その点、次の4は、「眼鋭き獣」というところに、年若い自衛隊員でも思わせるような体臭がムムムンとただよって来るように思われる。転じも十分であり、この句は傑作である。5これは一種の対付であろう。前句は恋人といる女性の心境を述べているのに対し、この付句では身重妻を連れた男性の心境である。このような付け方は珍しいが、おもしろいし、第一、この句は外の景らしいところに打越からの変化があつてよろしい。このような所まで考えて付けたのならば、大したものである。6制服を脱いだ恋人に対し、女性が何やかやと甘えるというのは、あまりに一般的であり、これを詩にするためには、何か具體性・特殊性・意外性というようなものを加えなければ無理であろう。その点、もすこしお考えいただきたいと思

とと思う。14これも前句の事情の説明である。これも理が通つており、御尤と思うが、御尤と思うだけでおもしろくない。ただ、この句の御愛嬌は、表現に一工夫して独白体を採用しているところである。独白体（ひろく会話体）はうまく使うと一巻に大きな変化を与えてくれる有効な手段である。

さて治定された句については、投稿された下坂さんのおハガキをそのままここで紹介させていただくことにしよう。

二十韻「糞虫」

付句

さりげなくお守りだよと犬張子 自他半

犬張子は昔新枕や産所に犬箱として使われたとか、そのとぼけた愛らしさがとても大好きです。

制服のポケットから出した犬張子、きつと掌にのる様な小さなものだったのでしよう。男性の内にひめられたやさしさ、心づかいを思いました。（下略）

この句は、表面的には愛とか恋とか、ギラギラしたものは一切ないけれども、いかにもしんみりとした夫婦の愛情がうたわれている。現代恋句の佳作の一つとしてよいであろう。

尤も、原句の犬張子は打越の芥子に障るので、犬はりこに直させていただいた。

次はもちろん七・七の短句、雑でお願ひしたいが、恋はもうこの位にして、大きく転じていただきたい。

新一夜四歌仙

昭和六十三年九月二十九日  
於 熱海サニーハイッ

秋の巻

とうがらし

うつくしや野分のおとのとうがらし

月待つばかり整へし膳

初獵の銃の手入れもねんごろに

畳の上にソファー竝べて

チンリンと大名時計刻を告げ

坂の途中で漫画取り換へ

学校を終へて直ぐさま通ふ塾

巴と降りしきる雪

風邪召すな酒すぎますとふはり掛け

玉の井の女ちよっと受け口

紳士録五つさばよむ年の欄

草いきれして荒れたり

月のもと蟬の寝言も時にもれ

蕪村

正江

隆秀

時彦

千町

江

秀

彦

町

江

秀

彦

町

冬の巻

枯野

蕭條として石に日の入る枯野かな

翅ゆっくりと開く冬蜂

家の者留守となつたる静けさに

掛けし時計をひとり捻子巻く

短冊の月の句会に積まれをり

インタビュアーの爽やかな声

ブランチは露のロッジの庭に出て

いつか手と手が重なりてゐし

吉原のお職の裔の乱れ髪

泪つづりて水晶の玉

飼猫の他に野良猫五六匹

医師もビールでくつろぎの月

茴香の匂ひの中でごまかされ

蕪村

千町

時彦

隆秀

正江

町

彦

秀

江

町

彦

秀

江

春の巻

行く春や

行く春や同車の君のさざめごと

雌蝶雄蝶のもつれあふ昼

草に木に八十八夜雨降って

鞆を押して烟草いっ服

小道具はペーバームーンピンで止め

秋刀魚陸へてうづくまる猫

人声がつゆけき路地に入り来たる

ざくろの絵付け筆をおかずに

新しき堂に詣づる浄瑠璃寺

連句病てふ病膏盲

つくづくとひとの女房うつくしき

泣きぬれし瞳のうるむ凍て月

曆売り釣銭わたす指の冷え

蕪村

隆秀

時彦

正江

千町

秀

彦

江

町

秀

彦

江

町

刺繡をする糸の溢れる  
 またしてもじゃれつく猫を叱りつけ  
 大町小町町さまさま  
 現し世は是生滅法花吹雪  
 つちぐもりして駈けぬける子等

江 彦 町 江

継子継母鉢かつぎ姫  
 パレットに赤の絵の具をたっぷりと  
 客に自慢のチーズフォンデュ  
 遠近の花いっせいに咲きそめし  
 鷹か鳩かとのどかなりけり

町 彦 江 町 江

金メダル掛け聞きし君が代  
 高空に輪を描きゐる鳩の群れ  
 家代々の嫌みその味  
 花の宴自社宣伝を唄ひ込み  
 鞭で励まし乗りし若駒

秀 彦 江 町 秀

抱卵期雨戸を閉めることならず  
 国際電話劇なかばに

彦 秀

春愁もテームズ河の橋の上  
 切裂きジャック通り魔の刻  
 小面を付けたるままに抱かれて  
 とうとうたたり恋も終りぬ

彦 秀

餓鬼岳の裾の山小舎万愚節  
 保父となりたる次男三男  
 のらくろ育ちアトム育ちと同居して  
 性の白書の売れて絶版

彦 江 町 彦

湖も山も越えなむひたぶるに  
 夜這ひうれしや待ってゐたのよ  
 いたこ巫女なにゆえ父の里訛  
 洋服ネクタイすでに喪の色  
 蕭々と雨の日続き月も出ぬ  
 齢重ねてそぞろ寒しや  
 奉書焼き鱧こんがり箸を取り  
 八雲旧居に松江大橋

江 彦 町 彦 秀 江 彦 町 彦

越後屋の手代集ひし炭俵  
 円高差益株価暴騰  
 空港のカレーライスのうまきこと  
 熱砂の民のコーランと剣  
 土つんでそれが墓なり雀来る  
 桐一葉落ちまた一葉落つ  
 月の卓高麗焼の壺を置き  
 ルオーのピエロやや寒の貌

彦 江 町 彦 江 彦 町 彦

昔の女にフィアンセ紹介  
 降魔術練金術師で詐欺師なり  
 蕪村描ける夜色楼台  
 さかづきに月の光りの溢れつつ  
 紅葉見の苑ひまご供にし  
 おむかへを待つばかりだとちろろ虫  
 ホットケーキを食べし夢など

彦 江 町 彦 秀 江 彦 町 彦

戦友と久潤を叙し別るるも  
 論語素読の声の高らか  
 下駄と靴片し片しで坊や佇つ  
 頬杖をつきさそふ春眠  
 花巡り都踊りの棧敷にて  
 昼も闌けつつ霞濃くなる

彦 秀

秋風のブランコゆらすふたりして  
 文字読み難き蔵の古文書  
 あてむきの駄菓子子の玻璃の蓋とれば  
 くるりまるまる皿の飯蛸

彦 秀

初霜の今朝は晴れたる山河にて  
 廃線となる筑波鉄道  
 よいとまけしながら家を守りをり  
 薄氷割りてすぎものする  
 散る花も宇治十帖の水の上  
 かぎろひのなか受けとめし穉

彦 江 町 彦

彦 秀 江 町 彦

彦 秀 江 町 彦

明石から淡路へかけて花曇り  
 ながめてゐたり塗り終へし畦

彦 秀

彦 秀 江 町 彦

彦 秀 江 町 彦

## 夏の巻

### ほととぎす

ほととぎす平安城を筋違に

いづれを見ても青き山垣

ニールックスニーカーはき通ふらん

コンピューターの占める卓上

月光を浴びて子供とぐうちよきばあ

夜食のうどんあつあつにして

芦刈の疲れし腰をいたはりつ

女性専科で鳴らす写真家

港の灯またたいてをり目を閉ぢぬ

うしろから来てしかとかい抱く

警官の不祥事続く落し物

猫派犬派で人を分けたる

公民館芝居で僕は玉三郎

寒月のぼる坂の上から

炬燵にて石戦はしいつか更け

お残りひとつ食べる大福

花びらの曼陀羅図絵にふりかかり

うなりも高く虹はたのしき

※三年前である。それを彼は覚えていて、やることになった。始めは八月にという話だったが、暑い盛りには連句に限らず重い仕事はやりたくない。延期して貰って、九月二十六日と決った。

話をしているうちに、どうせなら蕪村の上を行くように、五人集って、五歌仙としようということになった。発句は蕪村から拝借をする。実際には、杉内さん不参加で四歌仙となってしまった。

福井隆秀さんと相談をしていると、一つ食い違いがあった。福井さんは夕方六時ごろから始めましょうと言う。要するに、皆さん夜型なのである。ところが、私は徹底した朝型。平常は朝六時ごろから仕事を始める。その代り、夜は八時過ぎには寝てしまふというタイプである。そこで話し合っ

て、中間の三時からとして貰った。四歌仙にどのくらいの時間がかかるかというのが問題だった。一歌仙三時間、四つが並行して流れるのだから、六時間あればよいのではないか。予備を一時間か二時間と見て、七時間から八時間を考えれば間違いないあるまい。三時に始まれば、夕食を一時間として十時か十一時には全巻が満尾す

※お隣の正江さんが、私を横目でにらんで「お暇そうねえ」と皮肉をおっしゃった。その通りだった。

ところが、計算違いがあった。八時間で終るとしていたのが、十時間たっぷりかかった。四歌仙が一緒に終ると思っていたのが、早く終わった巻と、最後まで残った巻とで、一時間以上も違っていた。早いのは十二時近くに終り、遅いのは一時ごろまでかかった。私の脳細胞の活力は十一時ごろで切れていた。それは私ばかりでなく、他の三人もそうだった。作句力ばかりでなく、注意力も緩慢になって、式目の見落しが続出した。だから、この四歌仙の末尾に近い部分は、甚しく出来が悪い。

十一月に入ってから、私たちは集って反省会をした。ご母堂の不幸で、その日参加出来なかった杉内さんも来てくれて、局外者の立場から助言してくれた。あまりみっともないところは直してみたが、この程度でご勘辯を頂きたい。

私の付句で、ふざけ過ぎているのがあるが、これは、疲れてだらけた座を湧き立たせるためのもので、あえて、そのままに置いて置いた。その夜の雰囲気を残して置きた



遠足で歓声あがる遊園地

ストレイシープのままで中年

黒人のファッションモデルに魅入られて

男の契りあはれなりけり

邪な恋とは知れど神頼み

蝦蟇の油のさぁお立ち合ひ

水打って仲見世通り夕支度

敬老パスは使はずに住む

斗酒もやめいまは小壘の寝待月

風一陣に蟪蛄の斧

椎の実を手にあそばせて牧師なり

木椅子作りに休暇過ごしつ

ワープの字が見つからず見つからず

煎じ薬の盆に置かるる

北陸の帳場格子のほのぐらし

出初めし芹を洗ふ山水

吟行のひと仰ぎをり花万葉

気球ばかり春風に浮く

## 新一夜四歌仙の記

草間 時彦

蕪村の真似をして、一夜四歌仙をやってみませんか、杉内さんに言ったのは二、※

秀

町

江

彦

秀

町

彦

江

秀

町

江

彦

秀

町

江

彦

秀

町

る。私の計算はそうだった。そこで、考えたのは、その八時間の時間を脳細胞が新鮮

で、活撥に活動するようにするにはどうすればよいかということである。相手の皆さんはお若いから、そのような心配はなさる

まいが、私の場合、精神を集中出来る持続時間は三時間が精一杯である。それを過ぎると、思考能力ががっくりと落ちてしまう。

一夜四歌仙はそれでは困るので、マラソンのスタミナ配分に似た工夫をしてみた。

付句を咄嗟に付けるのである。浮かんで来た句を付ける。考えて付けたら、理屈で付けたりはしない。そうすると、時間が剩る。

その剩った時間は、何も考えずに頭の裡をからっぽにする。脳細胞を休息させるのである。又、ときどき立上ってペランダに出て、海を眺めたりする。八時間、坐りつづ

けではどんな強健な人でも、くたびれるに決っている。

膝送りの連句はそれでよいのだと思う。付句と付句との間が、休息なのである。その休息をスタミナ蓄積に当てるのが、私の作戦だった。それは成功した。付句が楽々と浮んで来た。最初の予定の八時間は、頭が冴えていた。※

かっただのである。

反省会では、執筆がいた方がよいという意見が出た。その通りだが、無理だと思ふ。十時間も他人の句のアラ探しをしようという酔狂な人物が居る筈はない。

蕪村の場合、二歌仙が先行して、時間が剩ったので、もう一度二歌仙を巻いたらしいというのも、体験から気付いたことだった。とにかく、始めての試みだからやってみて気付いたことが多いのは当然である。

顔ぶれについては、いい線だったと思つている。とにかく、一四四句の長丁場だ。余程芸達者な人でなければ持たない。四人なり、五人なりのうちに、一人劣った人が交ると、全体の感興が損なってしまう。その点、今回の皆さんは安心出来た。

先日、東明雅先生にお眼にかかったら、一夜四歌仙のことに触れて

「あの顔ぶれで手ごたえがなかったならば、いつでも手ごわい新ら手を差し向けます。いくらでも人がいます。」

とおっしゃった。どうやら、先生は私を猫藪道場の道場破りと見ていらっしやるらしい。

(終)

第二十八回 猫 蓑 会 二十韻 七卷 参加者 三十七名

平成元年一月十八日  
於 深川芭蕉記念館

寒の月

内田麻子 捌

小正月

福井隆秀 捌

平成の御代

米谷貞子 捌

わがまへに遠き芭蕉や寒の月

夜目にも凜と瓶の水仙

満場の拍手を浴びて壇上に

山高帽より鳩が飛び出す

オープンカー急ブレーキが利き過ぎて

右と左の美女を抱き止め

背信の日々を重ねて果知らず

出し小川に走る水馬

湯上りのスーパードライ髭濡らし

臨時ニュースは事故のテロップ

C・Mのなき二日間過ぎにけり

飛驒の匠は面を彫りつつ

野分して荒れたる庭に忍び逢ふ

寄り添ふ程に澄み渡る月

聖堂はマリア讃へるロザリオ祭

ナースコールに老いをゆだねて

落語聞く事を楽しみ浅草に

魚屋横丁に通ふ恋猫

幻の辻が花染花衣

春龍胆をひとつ見つける

麻子

澄子

徒司

良子

弥生

麻

司

良

麻

生

司

良

澄

生

麻

良

澄

同

司

生

平成の刻流れるて小正月

謡初めとて改まる席

散策の丘の公園ひともなし

すり寄ってくるよその飼猫

三千風は足摺岬十六夜に

まだ告げも得でもの思ひ草

つゆけさに唇寄せしガラス窓

震災戦災免れし家

道化師の内面悪くひとり酌む

ぶんぶん虫が顔に命中

ナイターのドーム錠々行列し

勝利の女神誰に微笑む

葛湯てふはかなきものを風邪見舞

鴛鴦の契りに降りそそぐ月

百年の恋もさめたり髪にて

プラスマイナスゼロの人生

マドロスのパイプの煙消えてゆき

菫格子に日差しうららか

観音の花の奥にぞおはします

手に手を取って児等の野遊

隆秀

千町

哲

利子

啓世

町

世

哲

町

子

哲

町

世

子

世

哲

町

秀

町

子

平成の御代寿がむ初懐紙

手斧始の響きくる音

青年の馬休ませる水辺にて

サンドイッチにはさむサラダ菜

籠居の母を見舞ひし夜半の月

後の恰の似合ふ紫

名女形素顔となりてすさまじく

星座占ひちょっと気がかり

一面のハイビスカスに海の風

氷くらりと溶ける耐ハイ

借金で出した小店の入りも良く

喧嘩刃傷絶えぬ裏街

マドリッド窓から窓へ干すシート

マザコン男年上の妻

根深汁けふはあの手を使ひませう

ぴたと閉ざせし寒月の門

寂聴尼嵯峨野の庵も住みあきて

ちりめんじゃこで啜るお茶漬

漫画字の葉書読みあふ花の昼

菓しべつけて巣立つ小雀

貞子

淳子

孝子

瑞枝

弘子

孝

枝

淳

弘

枝

孝

同

同

淳

同

弘

孝

枝

淳

枝

初懐紙

瀧川雅代 捌

雪吊り

金久保淑子 捌

初懐紙

山崎一恵 捌

誰かにも御代去り来たり初懐紙

雅代

雪吊りの縄の撓みや松の風

淑子

平成の御世寿ぐや初懐紙

一恵

客それぞれに淑氣満つ部屋

香

池に小波たてる大寒

彬風

青く鎮もる庭の櫛

清子

響きくるヘリコプターにきき入りて

千雪

もてなしの膳に客待つうれしくて

あかり

田舎より寒鯉の荷送り来て

みづゑ

肩ぐるまして嬰ののけぞり

好敏

到来物は好きな洋菓子

遊

ファーストフード馴れて猫舌

和子

月影をふみつ一足おくれゆく

天留子

村祭り月までとどけ笛の音

志げ子

長雨の上ればすでに居待月

房利

ちろろ鳴きやむ密会の宿

敏

残る蛍の思ひこがれつ

風

「今宵こまで」秋濁なり

和

雁渡る苦き恋をも捨て去りて

香

逢ひにゆく野菊の道に裾ちらし

遊

駆け落ちをしたのしないの冷まじや

清

バッハ聞きつつゆらすブランドー

同

フォルクスワーゲン急に発進

り

モンマルトルで絵を描いてるる

ゑ

モスクワの大河あらたにゴルバチョフ

留

消費税値上げ値下がり国際化

げ

ギャルソンは慇懃無礼金次第

和

雪の十勝岳の噴火続きぬ

雪

大喪の礼はじくそろばん

り

名所となりし峠路の寺

房

先生と鋤焼つつく遠慮がち

敏

緑蔭に犬の毛梳いてやりゐたる

遊

丁寧の新酒火入れの蔵竈

清

するりと猫の膝抜けて行く

香

山の端に出し月の涼しき

風

恩赦あり極道の妻立て通し

和

襟白く喪服の女のうつくしき

留

血圧を世間話に酒をくむ

り

婆縫ひ上げし祭半纏

清

「着痩せするね」と言はれ赫らむ

敏

共に白髪となりし仕合せ

風

夢幻か川の字に寝ぬ

和

玉葱を刻み涙で仰ぐ月

雪

心中の未遂のことは知らん顔

り

鳥葬の砂漠冬月皓々と

ゑ

五重の塔のシルエツト昏れ

香

女ぢやなくて男だったの

遊

しばし話題に喜多郎の楽

房

ジョギングの高校生は賑やかに

敏

九官鳥同じ言葉をくりかへし

同

こちよこちよと千らくすりっこはてもなき

和

風船となり宙遊ぶ夢

雪

窓を開ければ東雲の春

風

ポートルースの艇を押し出す

ゑ

うち晴れて淡路のあたり花見頃

敏

城門をくぐり天守へ花の磔

淑

劇団のトラックの着く花の下

清

磯にちらほら織釣る人

留

野遊びの輪にあがる歓声

げ

蝶々一羽垣を越えゆく

房

七草や

若尾よしえ 捌

七草や御世の代りの日となれる

よしえ

齊の粥のほの青き色

明雅

自転車の幼児補助椅子取付けて

正江

尾を振る犬へ両手さしのべ

久美子

節多き船板塀に月の射し

杉亭

願ひの糸でもつれたる仲

達子

おくんちでウインク送る兄嫁に

美

塩をバラバラお酢をきかせん

江

やうやくに辿りつきたる鮎の宿

亭

とぼけてうたふ羽抜鶏

雅

すすめられ買った株価がはねあがり

達

三百年で芭蕉もてもて

雅

古井戸に婚約指輪おっことす

江

ひょんなことから正妻の座を

美

冬の月電脳都市に降りそそぎ

達

ワイングラスを交はすひととき

亭

蛙構離りの飛鳥亀石

美

遠山は霞の奥に花盛り

雅

裾を取られし春疾風過ぐ

亭

余興膝送り二十韻二卷

松とれて

七日粥

松とれて平成と今改元す

久美子

沓脱石に初雀くる

正江

子供らの唄声高くなりゆきて

あかり

新幹線で通ふカルチュア

啓世

野ぼとけに片月薄くかかりをり

千町

並んで障子洗ふ川端

澄子

火が恋しそれより熱き瞳が恋し

雅代

赤き唇ぶいと横むく

一恵

ワンランク上のオシャレで吉祥寺

好敏

ゆっくり廻る天井のファン

遊

賑々し玉屋鍵屋の屋形船

降秀

講釈くどき酒飲み癖

淳子

結び文歌のてにはのおきどころ

達子

狐憑きしか公達に月

和子

道消えて茫々と草風に鳴る

弘子

緒顔蓬髪定年のわれ

杉亭

手始めの株は意外に儲かりぬ

美

ふらこ揺れる庭の片隅

江

花の枝ふれし熊本城の門

り

弁当ひらき春蟬を聞く

世

すめらぎのみまかりし朝七日粥

杉亭

ぼっぺんを吹き籠もりたる家

弘子

雪合戦子らと犬とのまじりぬて

哲

宣伝カーのゆるゆると行き

和子

酒の香の残る終電望くたり

達子

恋女房の眼冷ややか

利子

迷ひつつつい口づけの稲架の陰

淑子

電話ぶつんと小銭切れたる

淳子

白黒の映画懐かし巴里祭

降秀

竿かつがせてかはほりを追ふ

遊

馬喰の愚息早稲田の工学部

好敏

竹下流に選ぶ閣僚

一恵

料亭の仲居しなだれ紅絹の裏

雅代

つねられた跡心電図なの

澄子

短距離の選手阿修羅となりゴール

千町

わたる刺羽に南海の月

啓世

年金の額に見合ひし旅程表

あかり

ゴムのつなぎで河豚供養する

亭

ひとつとの嶺の花なり咲きそめぬ

正江

ふくらんでゆく軒の蜂の巣

久美子

## 猫蓑会おぼえ書

### 秋元正江

駒塚橋を渡ると神田川沿いに石堀をめぐ

らした敷地があり、堀の途切れた所を右へ曲ると公孫樹の古木や樺が聳える前庭がひらけ、正面に大名屋敷の門構えが見えます。

A C Cの受講生が連句実作一年のカリキュラムを終え、猫蓑会を開きましたのが、

この松声閣で明雅先生が学生時代にお過ごしになられたことがあると伺い、その偶然に驚いたのです。集会所を方々探しあぐねて、最後に自分の区内に、台地からの湧水をひいた池、手入れの行き届いた日本庭園に都会の喧騒は嘘のような佇まいが見付かったのです。

昭和57年4月21日、明雅先生他15名が集い明雅先生捌きの「夢多し」の巻をまきました。

「松声閣は旧細川侯爵邸にて我が縁の地なり」

この庭の春や昔の夢多し 明雅

以来平成元年1月18日の初懐紙まで、4月、7月、10月、1月の年四回の猫蓑会を一度も休会することなく続けてまいりました。10月の芭蕉忌は会場を深川芭蕉記念館に移し、その間、松声閣が抽選のため、後楽園涵徳亭、近代文学館に変わったこともありです。

昭和58年6月5日の明雅先生の突然のご入院、しかし奇跡的に7月20日の第六回猫蓑会は、先生のご全快を祝う会となりました。先生の発句で四巻をまいりました。

「重き病も快癒して」

ビール飲む生きて再び息をして 明雅

この年の6月に「季刊連句」が創刊され出来、この多かつた年です。

昭和61年の初懐紙から二十韻を六巻、それは猫蓑会で第二回武翁賞（第一回は該当作なし）受賞式があり、二十韻は時間的にも都合よくたのしめました。

二十韻の形式は、明雅先生が創られたもので、昭和59年12月5日国島十雨さんを迎えられた「師走の町」が第一作です。

猫蓑有志の旅も、出水あとの奥多摩水香園、海猫渡る外房大原、荒磯に遅い春を迎

えた五浦横山大観別荘、山霧の仙石姥子の折口信夫旧別邸叢隠寮、根津芦丈先生墓参りとこひがんぐくらの高遠、花に寝た吉野山竹林院、おくのほそ道第一回の紅花の尾花沢、銀山温泉、第二回は、残菊の加賀、山中温泉と、車中に宿にと連句を巻きました。正式俳諧興行は昭和61年10月が最初で、昨年の10月で五回を数え、昭和62年4月には亀戸天神藤祭り奉納、昨年も参加いたしました。

明雅先生は「連句と女性」という題で、

『芭蕉の代表的作品には全く女性の影は存在しないが、現在では連衆に女性の進出はめざましく、女性ばかりで作った連句は、やはり綺麗事すぎて物足りぬものが多い。

男女それぞれ入り交っての一座にこそ芭蕉の時代になかった新しい連句が生まれ出る可能性があると思う』と書かれています。

式目も二十韻表にあることは守って、猫蓑ではもう少し緩やかに思うこともありますが、皆の共感を得て芭蕉に迫る現代の連句作品をめざすのが会の念願です。

会の運営その他諸々、式田和子さんの中広にお力を頂いて共にお手伝いささせて頂きました。

## 猫 蓑 会

猫蓑会	日 時	会 場	人数			旅	季刊 連句
1回	57. 4. 21	松 声 閣	16名	1 歌 仙	猫蓑会発足		
2回	57. 7. 21	同	14名	1 ”		8.26 奥多摩水香園	
3回	57. 11. 17	深川芭蕉記念館	26名	3 ”	芭蕉忌		
4回	58. 1. 19	松 声 閣	20名	5 ”		3.17 外房 大原	
5回	58. 4. 20	同	21名	3 ”			
6回	58. 7. 20	同	21名	4 ”			
7回	58. 10. 19	芭蕉記念館	25名	4 ”	芭蕉翁参百回忌取越し 追善歌仙興行		3号
8回	59. 1. 18		28名	4 ”		3.30 五浦大観 (記事5号掲載)	4 ”
9回	59. 4. 18	松 声 閣	20名	4 ”		5.16 沙羅の会誕生	6 ”
10回	59. 7. 18	同	25名	4 ”			6 ”
11回	59. 10. 17	近代文学博物館	29名	5 ”	芭蕉忌	8.27 姥子 叢雲寮	7 ”
12回	60. 1. 16	松 声 閣	25名	5 ”			8 ”
13回	60. 4. 17	同	28名	5 ”		4.22 高遠と伊那 芦丈先生 墓参	9 ”
14回	60. 7. 17	同	32名	6 ”			10 ”
15回	60. 1. 8	芭蕉記念館	28名	6 ”	芭蕉忌		11 ”
16回	61. 1. 8	松 声 閣	30名	20韻6巻	武翁賞受賞式 会員出版祝賀会		12 ”
17回	61. 4. 30	同	28名	5 歌 仙		4.14 吉野 竹林院	13 ”
18回	61. 7. 16	同	30名	20韻6巻			14 ”
19回	61. 10. 15	芭蕉記念館	36名	20韻6巻 正式俳諧1巻	芭蕉忌正式俳諧		15 ”
20回	62. 1. 21	松 声 閣	37名	20韻6巻	武翁賞受賞式		16 ”
21回	62. 4. 25	亀戸天神社	40名	20韻7巻 正式俳諧1巻			17 ”
22回	62. 7. 15	松 声 閣	28名	20韻9巻		7.10 奥の細道 尾花沢銀山温泉	18 ”
23回	62. 10. 21	芭蕉記念館	33名	20韻6巻 正式俳諧1巻	芭蕉忌正式俳諧	9.30 鴨立庵新庵主 入庵記念祝賀会	19 ”
24回	63. 1. 20	松 声 閣	35名	20韻6巻	武翁賞佳作受賞式	3.20 明雅先生叙勲 祝賀会 学士会館	20 ”
25回	63. 4. 30	亀戸天神社	41名	20韻8巻 正式俳諧1巻	亀戸天神藤祭り 正式俳諧		21 ”
26回	63. 7. 20	松 声 閣	31名	6 歌 仙			22 ”
27回	63. 10. 23	芭蕉記念館	36名	20韻6巻 正式俳諧1巻	芭蕉忌正式俳諧	10.4 奥の細道 加賀路 山中温泉	23 ”
28回	平成 1. 1. 18	同	37名	20韻9巻	武翁賞受賞式		24 ”

■電通連句部

残る紅葉

秋元正江 捌

魔法つかいの弟子たち

山口 美 恵

人力車残る紅葉を散らしけり

備長炭でとりを焼く店

オペラみし声ひびかせて語るらん

曇り硝子に雨粒をみる

箱根まで月と旅した道なれど

見舞の蘭が恋のきっかけ

腐れ縁噂ひろまり秋開くる

投票率は史上最底

原発の安全論議尽き果てぬ

ボージョレヌーパー・カットグラスに

公園の丘から港見下して

まだ名の付かぬ大熊猫赤ん坊

短夜をめぐるふたりに月淡く

ディンクスたちの夢の生活

型録で揃へし愛を浪費する

老いの棲と決めし山里

空海の跡をたづねて吟行す

雲雀を真似る口笛のぬし

花篝黒式尉の翁面

春愁をよぶ牛の反芻

昭和六十三年十一月七日

・ 於 電通南寮

美恵

秀樹

碧

昭子

樹

碧

恵

子

樹

子

樹

碧

憲助

碧

樹

子

樹

助

子

正江

助

正江さんの捌、というとなんとなく座に緊張感がただよう——ような気がするのは何故だろう。本来ならば明雅先生に捌いていただくときに、いちばん緊張するはずなのだ、そうではない。

「さあさあ、美恵さん、出して、出して」「昭子さん、何でも良いんですよ。さあ」

と言いつつ、にゅつと手をさし出される。まず、あのスタイルがくせものなのだ。もう少し、何とかならないものかな、と思案していても、明雅先生のおのにゅつにかかると、ふらふらと短冊をさし出してしまふ。そして付け味もはっきりしない凡行になにやらチョイチョイと細工をされると、輪郭のくっきりした句に変身する。まるで魔法でも見ているような鮮やかさ、心地よさ。

この甘い一瞬を味いたくて我連衆は、毎月一回、路地裏の古座敷に集まって来る。

正江さんはちょっと違う。上等の獲物がかからないか、と辛抱よく待って、やがて、さっと網を上げる。獲物をさし出すほ

うもドキッとする瞬間である。そして、明雅先生の高弟らしく、チョイと魔術を使って、美しい一巻にまとめて下さる。(この二十韻も先年いただいた武翁賞・佳作の作品もちゃんと魔法のコナがかかっている)

もっともそのチョイチョイのさじ加減が、明雅先生の前よりも少量である。

つまり、正江さんは、私たちをあくまで一人前に扱おうとして下さっているのだらう。ところが、それだけの力のない私たちは、どうも緊張してしまふ、という状態らしい。

明雅先生はじめ、徒司さん、東夷さん、そして正江さん、とたくさんの先生に捌いていただいて、数年がすぎた。そろそろ自分たちで、と思うのだが、どうも私たちに

は仲間魔法をかける自信が無い。どなたかあのコナを分けて下さらないものだろうか。

か。

柏連句会

二十韻四卷

昭和六十三年十一月十三日  
於 市川紫烟草舎

八つ手咲く 東 明雅 捌

柗咲く

秋元正江 捌

真間の井

福井隆秀 捌

朱の褪せし真間の継橋八つ手咲く

明雅

柗咲く白のみちたる匂ひかな  
ゆつくり登る冬の石段

正江

冬の日の紅葉輝ふ真間の井戸  
寛のほとり舞へる綿虫

柚平

淡くたゆたふ初冬の水

幸雄

荷を造る麻紐の玉ころがして  
ぴくとも耳を動かさぬ猫

光治

子ら作る千代紙人形飾るらん  
藍染めの布裁ちて思案す

庸子

厨から父呼ぶ子らの声のして

一恵

月光に備前の壺を浮きたたせ  
紅葉しのばせ恋文を出す

同

白玉の酒をふくみて仰ぐ月  
忌を修しつづ論ず西鶴

降秀

秋袷帯に合はせてえらびをり

秋景

誰彼に抱かれしこと残る蠅  
フランス料理ワイン・シャンパン

治

胸うちもいよいよ熱き火の祭り  
空箱に伏せ眠る三毛猫

美庸

髪結うてべつたら市の二人づれ

雄

シスターの豪華客船降りてくる  
死ぬ気がせぬと姑のいふ

子

車椅子にて詣づ稲荷社  
池の辺に佇てば寄りくる鴨の雛

平郁

赤い首輪のこの烏猫

同

病室の窓から見ゆる虹の端  
蛍袋に月を詠む会

み

キスで倒れし干草のなか  
過去形の話の多き艶話

庸

門に佇む托鉢の僧

同

清親の版画あつかふ古美術商  
ゴルフウイドウ不倫重ねる

江

塩ようかんはいつも品切れ  
ゲレンデを照らす月影人まばら

美

労咳の仙人臭き顔となる

雄

もういいわ生臭坊主のしつけて  
消防車来る対岸の火事

子

ビデオカメラの凍てつて廻らず  
八十年女性解放叫びつづ

平郁

おきまりの練習曲が隣から

同

公園に大きな鴉群れをなし  
春泥つきし子の靴を拭く

治

銅像歌碑にうらら公園  
知司のわれ花をうながす場となりて

平秀

旅の宿ベランダに更け仰ぐ月

同

高きより望む葛飾花ぐもり  
塙の底より揺らしみる蛸蚪

子

紫雲英田あたり高き口笛

庸

発掘進む華清池の跡

雄

春泥つきし子の靴を拭く

治

紫雲英田あたり高き口笛

庸

惚れ葉惚れられ葉さまざまに

雄

公園に大きな鴉群れをなし

治

銅像歌碑にうらら公園

平秀

あなたなくては居れぬわたくし

雄

公園に大きな鴉群れをなし

治

銅像歌碑にうらら公園

平秀

年甲斐もなしに鬻に魅せられて

雄

公園に大きな鴉群れをなし

治

銅像歌碑にうらら公園

平秀

辺り一面笑ふ山々

景

春泥つきし子の靴を拭く

み

銅像歌碑にうらら公園

平秀

うらうらと平安宮の花の雲

同

高きより望む葛飾花ぐもり

子

紫雲英田あたり高き口笛

庸

春惜しみつつ酔うてうたたね

雄

塙の底より揺らしみる蛸蚪

治

紫雲英田あたり高き口笛

庸



紫烟草舎にて

下鉢 清子

十一月十三日(日)、市川市里見公園の

紫烟草舎で、柏連句会の連句二十韻の興行

が行われた。小春日和に無風の良き天候に

恵まれて、JR松戸駅より市川駅行バスに

て真間山下まで行く。興行前のひとときを

真間手古奈堂周辺の散策を楽しむ計画。

先ずは名刹弘法寺(古名求法寺)へと櫻

落葉を踏んで行く。明雅先生は野鳥の名に

明るく、鶉や椋鳥や鶉などを目敏く樹間に

追われたり、椋の実を掌に「食べると甘い

よ。」と仰る。弘法寺の伏姫桜も既に冬木

の模様、巨木の下には富安風生句碑。

まさなる空よりしだれ桜かな

仁王門横手の稍小高い所に水原秋桜子碑。

梨咲くと葛飾の野はとの曇り

袴腰の鐘楼など見つつ石階を下りて万葉

の昔よりの名所、継橋、手古奈靈堂へ。継

橋の傍の終は花の真つ盛り、人影がさして

もほろほると零れ、寄ればほのかに匂うも

風情。裏手の真間の井、片葉の葦の亀井院

は、北原白秋が妻江口章子と、大正五年五

月より六月半ばまでの約一ヶ月半を過ごし

た所で、白秋にとっては最も困窮を極めた

代

子

司

町

代

司

町

代

司

町

代

司

町

代

司

千町

雅代

徒司

紫烟草舎

下鉢 清子

白秋の旧居に憩ふ冬紅葉

縁をゆっくり霜枯の蜂

水平線舟は三つ四つ波もなし

手を取り合ってスキップの子ら

天寿国編帳に棲む玉兎見ぬ

新酒にも飽き出湯にも飽き

梢より真赤に下がる烏瓜

キャリアウーマン恋のベテラン

さり気なき例の目くばせ右左

まんぼう獲れた食べべにおいてよ

葉箆竹わからぬものの残りをり

JR年金もはやどん底

ゴリキー初演の人に夏の月

映画女優と内々の情

乱れ髪相聞の歌謡んじて

レトロブームの蛇の目傘さす

キューポラの消えゆくひとつまたひとつ

仔猫仔犬の遊ぶ店先

花の昼孔雀の筆をすぎげり

羽織りて軽き春の袖無し

代

子

司

町

代

司

町

代

司

町

代

司

町

代

千町

雅代

徒司

の自ら名付けた紫烟草舎に移り、歌集「雀

の卵」を編集した。会場の紫烟草舎は小岩

より里見公園内に移築保存したものである。

十一時五十分より句座、四席。顔ぶれの

中には久し振りにご参加の井上幸雄、中村

建治の両氏に朝日カルチャー教室の山崎一

恵、瀧川雅代の両氏も加わり多様な顔ぶれ

となった。不肖清子捌の席は杉内徒司、原

田千町、瀧川雅代のベテラン三氏。発句は

白秋の旧居に憩ふ冬紅葉

その日その場その時の挨拶句にまことに

相応しく頂戴する。折しも白障子の外の縁

を、太稿も鮮やかな大きな雀蜂が歩く。

縁をゆっくり霜枯の蜂

清子

第三は千町さんの転じ美事に、続いて雅

代さんの第四さらりと。十五時半には四巻

満尾となった。帰途は下矢切にてバスを降

り、「野菊の墓」の辺りまで行く。矢切野の

蕭条とした初冬の情景をずんずん沈む真つ

赤な太陽も久し振りの感激。石垣高く垂れ

た郁子の実を苦心の末に手に入れた正江さ

んのお顔などなど。人夫々の収穫と連衆の

びったり合った息、楽しい一日であった。

■四宮連句会

後の月

永島靖子 捌

後の月豹の眼のあからむも

靖子

異国の酒の炎ゆるやや寒

孝子

秋乾き引く小抽出かろやかに

和子

散歩の好きな父のステッキ

春吉

かかる世の愛しきものに万華鏡

篤子

胸を背に受け單車飛ばせる

好敏

ひざまづき足をお舐めと山田詠美

遊

アイスクリームどんどんとけ

篤

御神輿の少ない年となりけり

和

峠越えゆく白川の郷さき

靖

婆に聞く小学校の七不思議

敏

蓋がひらけば空っぽの壺

篤

つごもりの畳紙あれこれ並べられ

孝

寒月に文読める横顔

遊

ぼつつりとライターともす閑静か

和

大きくなりし記念樹の松

吉

かもめどり遊覧船にたはむれて

孝

風船売りのいかに暮さん

吉

竹割籠心づくしの花の宴

遊

山門に倚り春の夢みる

敏

昭和六十三年十月二十四日

於 四宮区民集会所

後の月一巻

永島靖子

折からの後の月。仲秋の名月の頃の華や

ぎとはどこか違う沈んだ宵の気配に、あか

あかと見ひらかれた豹の眼を幻想して発句

とした。写真とはいささか逸れた句の弱さ

を、身のうちに炎える異国の酒という洒落

たクッションで支えて頂いた脇句は、以下

の躍動的な景・情を導き出すはずみとなっ

たようである。第三は一転してこまやかな

日本的情緒の句、抽出のかるやかな音が聞

こえるよう。父のステッキと合わせて家庭

の一隅のスケッチの趣。少々異色の表四句

ではなかるうか。

裏に入り、表四句を総括するような万華

鏡の登場は、二十韻の格を大きくするよう

に働いている。続く恋二句は現代風俗。こ

のあたりまで、いささか事柄の上で前句と

の付きが淡く、一種の雰囲気ないし句いで

つながっている。父のステッキならぬいわ

ゆる。『夜店のステッキ』の弊を怖れつつ、

くもなかった。

九句目の御神輿の少ない年は、お祭自粛

の時事性を上品に描出し、以下の運びを地

に足のついたものとする契機となった。合

掌造りの白川郷に対し、古い小学校の怪談、

空っぽの壺がよく付いており、続く恋は前

の恋とはガラリ変わった大人の恋。ライター

のともる闇から一転外景へ。記念の松は

浜離宮あたり、遊覧船は隅田川か。風船売

りもなつかしい。落花を浴びつつ奥ゆかし

い宴の終わったところで、夢を更に遠くへ馳

せて一巻を閉じる。

連句の勉強を始めて一年余、捌きを指導

して頂くこと数回。序破急の呼吸等まだま

だ皆目掴みかねているが、明雅先生のご教

導と、連衆諸先輩のご指導・ご協力を得て、

晩秋の一刻、連想の織りなす一巻の絵巻が

現出されていようか。前半、後半それぞれ

の山場をもちつつ行きて還らぬ景が見えれ

興流連句会

紫蘇の実

尾向閑堂 捌

興流連句会のご紹介

田原竹無齋

紫蘇の実をしごいて指を染めにけり

閑堂

俳句もやらない無風流人が五人程集って

秋の鯉のたたき盛る皿

彬風

連句会をつくり、毎月一回集って、連句らしきものを、を作り始めてから、もう足かけ

三五夜の月見の宴酣に

桜丘

五年も続いている。

供はつらいと奥をうかがひ

草舎

「興流連句会」という名前は、メンバーが

高級車ずらりと並ぶ丸の内

竹無齋

日本興業銀行の出身者なので、同行のO・

旧友と会ふ旨き珈琲

果然

B組織「興流会」から採ったもので、五人

百円で恋の辻吉と出で

風

の中四人は大正三年生れ、一人は(や、若

黄色いスカーフ振りてウインク

堂

く?)大正七年生れだから、年令も境遇も

向日葵の根根にゆるる風そよぎ

舎

似たような老人の集りで、それだけでも変

夏雲雀鳴く山の湯の宿

丘

化を尊ぶ連句の世界にはなかなか条件が悪

荷を背負ひ大きな男独り行く

然

い。その上、法律とか経済については曲り

国際化した農村の嫁

齊

なりにも勉強させられ、又実社会の経験も

囁きも笑顔で通ふ仲となり

堂

一応はあるとはいえ、悲しいかな江戸時代

二世を契る縁たつとき

風

の普通の教養である源氏物語、古今、新古

月皎々照らす深雪に塵もなし

齊

今等の自国の古典文学はおろか、儒佛の素

着ぶくれし子の駆けつ転びつ

然

養にも欠ける身が、月や花を賞で、或は恋

年老いし母の気遣ひ細やかに

舎

だ旅だとせめたてられる。本心で出るのは

余寒の見舞ひ土産抱きて

丘

「老」の述懐や「酒」の楽しみ位だから、

お座敷に花咲き満てる金屏風

然

凡そ四苦八苦の連続である。

暮れゆく春の仄明かき窓

舎

本人がその位難儀するのだから馬場彬風

於 興流会談話室

氏もさぞさぞ苦勞のこととお察している。

初めは型通り歌仙から始めたが昼から夕方迄かかってやっと半分の十八句、あとは翌月送りになる有様であったから、大変な作業で、そのうち東先生の提唱される二十韻に切替えて、やってその日のうちに終了出来るようになって、ホッとした。  
そのうち次第に順調に慣れてきたが、そうなるのと少々生意気になって、二十韻ではどうも述べ足りないところがあって、矢張り歌仙は歌仙だけの良さがある等と云い出す者も出たり、彬風氏を悩ませている次第である。  
比較的最近作の二十韻を載せてご批判を仰ぎたいと思うのであるが、最初に述べたように、「連句らしきもの」を脱却してはいない。唯、我々自身余り之に拘泥はしていない。  
それは彬風氏もよく云われるように、「煩悩を舌の先に払って」句作のよしあしはまがりなりにやっておけ、「其色にある共鳴」を感じるからだと思つ。

■赤山連句会

酸漿市

二宮操一 捌

赤山連句会について

二宮操一

誘はれて酸漿市の灯幾干

操一

裾をからげてのぞくすててこ

弘喜

大葉缶沸きいだしたる蓋ならん

正江

畳の縁で眠るきじ猫

稔

待ちわびし衛星放送月明り

孝

膳に添へたる初秋の枝

明

人の妻人の夫なり虫しぐれ

江

一寸待ったとナイフ取り上げ

稔

内臓の移植めぐりて決め手なし

明

長逗留の倫敦の街

同

ふるさとのゆず湯に浸りほのぼのと

稔

鉄鉢に米もらふ凍月

江

パソコンもおもちゃとしたる現代っ子

孝

この頃はやる恋の辻占

喜

足ぬきの遊女づねなり舟の中

同

大盃の朝焼けを呑む

孝

ばやきつつ六十路の坂に立ちどまり

明

紙風船とたはむれる鶏

孝

遠山も里山もみな花霞

喜

孫といっしょに掬ふ白魚

稔

昭和六十三年七月十一日・十二月二十二日

於 日本橋浜野口ビル

いつまでもゴルフ・碁・麻雀だけではあるまいと、五十の坂を上りつめた往年の悪童が殊勝にも志した連句の道。縁は、なかつたわけではない。四十六年前、われらの中学に国語教師として颯爽と現れたのが、東明雅先生だった。戦闘帽と国民服一色になり始めたころ、縞の背広と燕脂のネクタイがとても新鮮だった。まだ教師の経験は浅かったようで、窓の外や天井に目をやりながら講義をされていたように記憶する。そんな東先生を、苗字をもじって「すかし、すかし」と囃したたり、悪さばかりしていて、どんなテキストを教わったかすら全然覚えていない。

時の流れ、大したうだつも上がらぬままに定年期を迎えて、自発的に選んだテキストが先生の「連句入門」。だがコチコチの頭ではとても鑑賞どころじゃない。じかに教える乞うには敷居が高すぎるし、悪童再教育のチャンスとばかりしごかれてもかわない。「どなたか優しい先生はいらっしゃいませんか」とお願いして引き合わせて

いただいたのが、秋元正江先生である。自宮一人、銀行出身一人、新聞記者出身一人。二カ月に一度の目標さえ達せられず、半年近く空いたりする。その上いくつになっても直らぬ不勉強、勝手気ままな古馬集団とあっては、いかな名伯楽をもってしても、簡単に進歩するわけがない。他人の句にはせつせとケチをつけるのに、自分の一人よがりの意味不明。詩藻貧困によるスピード不足。二十韻満尾に二夜がかりの現状である。

「酸漿市の巻」は、秋元先生のご指導にあずかって約一年の、三巻目。戦後の経済成長の時代を、実務人としてそれなりに勤勉な努力を続けて来た男たちの、新たな遊び心による真似ごとである。またまた不肖の弟子に終わるか、蕉風俳諧の神髓にわずかも触れ得るようになりそうか、一年一学期の中間テスト結果とでもご理解ねがうことによって、香り高い誌面を汚すおわびとさせていただく。

歌仙

木守柿

下鉢清子捌

「木守柿」の巻に寄せて

下鉢清子

仰ぎけり一日風の木守柿

残る蝗のひそむ石くれ

サイフォンに珈琲の香の漂ひて

宅配便でとどくお土産

嬰背負ひぶらぶら歩き照らす月

秋場所はねて柝をたたく音

落武者のごとく突っ立つ藁ぼっち

出向となり苦き酒呑む

窓口はいつもここにチャーミング

地藏眉毛を抜きしメークよ

型録で選んだ嫁の大当り

受け継がれたる千家十職

浅草の奥山風景かっぱれも

どぜう仕入れに月の裏城戸

宿題をもてあましをり夏休み

鳩時計から鳩が顔出す

野良犬も野良猫も寄せ花見客

鐘供養して尼は古稀過ぎ

清子

正江

千恵子

千町

まさし

文人

徒司

和久

し

江

恵

町

し

司

久

江

恵

久

日もいよいよ短く、おのずから歳末の慌しさを間近に感じさせられる頃合の四日。いつものコース、町屋駅前より都電荒川線に乗車、終点早稲田駅下車で関口芭蕉庵に参上しました。神田川の水量がぐっと減って見えるのは、川の鯉たちも冬籠りで深場に沈んでしまい、緋鯉の朱色が少ないからでしょう。橋際の水神社の二本の大銀杏は、まだしっかりと枝々が黄葉を抱いていて、傍らの飯桐は真っ赤な

実をたわわに垂らしていました。庵を包む茂みを飛び交い鋭い声を降らすのは、鶉、椋鳥。時折細身の鶺鴒の姿。幾つかの柿が木守り顔で梢に残り、色褪せたむらさきさきぶの実も健在。横山様にご案内いただいて高台の松宇園の紅葉見物をいたしました。此処は都心の吟行地の穴場、見頃の楓が真紅や黄葉に装いを凝らし美しさに感嘆の声を挙げ

るのみ、散策に時間をとり席の開始は一時二十分でした。極月のことでもあり、明雅先生ご渡米中のことも影響してか総勢は八名、二席との初案も撤回して一席ということに。錚錚たる連衆を前にしての捌清子としましては極度の緊張で始まりました。連衆のご好意によって発句は捌で、

仰ぎけり一日風の木守柿

清子

木守柿に静かな里の風景をふくらませて脇を、

残る蝗のひそむ石くれ

正江

暖かに門を濡らしぬ細き雨

渋茶を啜り暮敵を待つ

パキスタン女首相の誕生し

古代政治を操りし太占たまて

のけぞって飛機をのしる基地の島

へのへのもへじにアカンペーする

狐火の丑三つ時をふたり連れ

岡本かの子毛衣の恋

辣蕪のやうに次々服脱がす

電動マネキン飾るご時世

月光に介護病棟泛かびける

耳をすませば虫の鳴くのみち

餅とだんごとうどん売る店

漫画本立ち読みの児にはたきかけ

春の炬燵にもぐりゐる父

花の橋遠ざかり行く鼓笛隊

折網笠に鯛の浜焼

昭和六十三年十二月四日

於 関口芭蕉庵

町 人 町 恵 司 人 江 久 江 恵 人 司 恵 町 人 町

発句、脇句の静の風景を若い感覚で動に転じた第三は、

サイフォンに珈琲の香の漂ひて

千恵子

ある時ある場で私はコーヒ代を頂いたことがあります。

その表書きに「好日代」と。注釈により祝い事などの時、

何気ないプレゼント用に、縁起を担ぐ書き方が近頃は用い

られると伺ったことを頭の隅に、千恵子さんの好日をなど

考え中に、宅配便も折良く届きます。

宅配便でとどくお土産

千 町

手だれ七人の間断無き付けに、あれもこれも皆付けて置

きたい思いに、その度に沈黙考、果てはトンネルの出口

を見失ったり、不安で猫背になったりと進んで行きました

が、到来物のチョコレートの商品定めなども気分転換に大い

に役立ちました。裏の恋の超現代的な

地藏眉毛を抜きしマークよ

正 江

型録で選んだ嫁の当り

千恵子

を受けて「千家十職」「浅草」風景に「どげう仕入れ」

と、この辺りとうんと転がり、特に名残表

狐火の丑三つ時をふたり連れ

文 人

岡本かの子毛衣の恋

正 江

辣蕪のやうに次々服脱がす

千恵子

の、恋句、裏とはくらりと代った妖しの風情には脱帽さ

せられました。冬日の濃く射していた庵の白障子も穏やか

に暮れ、思案投首の捌も五時半満尾。捌くことによって一

層の理解を深めることができ、こうした場をお与え下さい

ました連衆に深く感謝申し上げます。一日でした。

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 九四一―一四四五

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーカー下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時  
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

＊猫養会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)  
会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一―九六四九

△御注意△

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

著 雅 明 東

夏	の	日	角川書店(絶版)	価	700円
連	句	入	中公新書	価	540円
芭	蕉	の	岩波新書	価	320円
猫	の	恋	永田書房	価	2300円
連	句	辞	永田書房	価	2300円
		典	(杉内徒司・大畑健治共著)		
			東京堂出版	価	3500円

雁帛往来

▽五月六日(土)は鴨立庵で俳諧興行。また、五月十四日(日)は瓢左先生の一周忌として青時雨忌を興行することになっている。  
両方とも御後援よろしくお願い申し上げる。  
▽編集部宛てに、評論・作品その他の原稿をお送り下さい。原稿の取捨は編集部におまかせ下さい。

季刊「連句」 第二十四号

平成元年三月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽27 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方

電話 〇四七二(七五)一一九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 (株)岩田印刷所

▽27 柏市豊住一ノ一ノ二二

電話 〇四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

必須の知識をすべて網羅!

初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

版 B6判

三五二頁

三 三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編

二二〇〇円

## 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

二八〇〇円

## 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

二八〇〇円

## 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語一千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一〇〇〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 B 白石大二編

国語史辞典 B 林巨樹他編

日本語語源辞典 B 堀井令以知編

京都語辞典 B 井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B 天沼・車編

隠語辞典 B 榎垣・美英編

近世上方語辞典 A5 一五〇〇〇円

花柳風俗語辞典 B 藤井宗哲編

大正新語俗語辞典 B 榎島忠夫他編

難訓辞典 B 中山泰昌編

名乗辞典 B 荒木良造編

名数数詞辞典 B 森 睦彦編

あいさつ語辞典 B 奥山益朗編

新版 ことば遊び辞典 B 鈴木業三編

類語辞典 B 鈴木・広田編

類義語辞典 B 徳川・宮島編

表現類語辞典 B 藤原与一他編

新版 文章表現辞典 B 神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2